

英語で教える日本語・日本事情

ー グローバル30における日本語・日本事情コースについて ー

ブッシュネル・ケード

要 旨

筑波大学は、平成21年度に、文部科学省による「国際化拠点整備事業（グローバル30）」を実施する機関として選抜された。グローバル30の主たる特徴の一つとは、英語を媒介語とした教育環境で学位取得が可能だということである。ところが、授業がすべて英語で実施されるとはいえ、グローバル30で学ぶ留学生には日本語や日本の文化・社会・歴史等に関する知識を身につける必要もある。このようなグローバル30所属留学生のニーズを受けて、筑波大学留学生センターを開設母体とする「グローバル30日本語・日本事情等コース」を新たに設置した。本報告書では、まず、グローバル30日本語・日本事情等コースの概要を提示する。次に、教育内容や到達目標を説明し、最後に今後の課題を考察する。

【キーワード】 国際化拠点整備事業（グローバル30） 日本語・日本事情科目 媒介語による日本語教育、参加型学習、アフォーダンス

Teaching Japanese and Japanese Issues in English : a report on the Global 30 Japanese and Japanese Issues Course

BUSHNELL Cade

【Abstract】 In 2009, the University of Tsukuba was selected by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science, and Technology (MEXT) as one of the implementing universities for the globalization project known as “Global 30” (G30). One of the most salient features of G30 is that it makes possible the acquisition of an undergraduate degree by completing coursework in English. However, while it is true that classes are taught entirely in English, it is still of crucial importance that G30 students gain an ability with the Japanese language, and a knowledge of Japanese cultural issues. In answer to these learning needs of G30 students, the International Student Center of the University of Tsukuba began a new course in Japanese and Japanese issues. In this report, I first outline this new course, describe its contents and goals, and then consider several issues on the horizon.

【Keywords】 Global 30, Japanese/Japanese Issues, Japanese language education via a mediating language, Participatory learning, Affordance

1. はじめに

筑波大学は、平成21年度に文部科学省による「国際化拠点整備事業（グローバル30）」を実施する機関として選抜された。グローバル30の主たる特徴の一つは、英語を媒介語とした教育環境で学位取得が可能だということである。つまり、グローバル30で開設されている授業は、原則として、すべて英語で教えられる。日本の大学でこのような学習環境を提供するには、次のような目的がある。まず、日本の大学で勉強する留学生の人口を増やすことである。本来、日本語能力の低い留学生にとっては、日本語で教えられる授業を履修することによってしか学位取得ができないことが大きな障害となり得る。しかし、すべての教育活動を英語で行うことによって、たとえ日本語が全くできない学生でも、日本の大学での学位取得が可能になる。2つ目は、日本人学生の英語能力や国際性を強化することである。グローバル30英語プログラム所属の留学生との交流により、日本人学生の英語使用が増え、それに伴って異文化的な発想をより深く理解し、国際的な舞台で効果的に活躍できる人材の育成につながると期待される。そして3つ目は、日本全国の大学の国際化を促進することである。他大学とのネットワークを形成し、拠点大学の資源や成果を共有することによって、本格的な国際化を果たし、その効果を全国的に拡大させていく。

現在筑波大学では、生命環境、および社会・国際、医療科学という3つの学類でグローバル30のプログラムを開設している。それぞれの学類では、学位取得に向けて、必要な専門的知識を英語によって学生に与える。ところが、授業がすべて英語で実施されるとはいえ、グローバル30で学ぶ留学生には日本語や日本の文化・社会・歴史等に関する知識を身につける必要もある。その根拠としては、授業以外の活動（例を挙げれば、グローバル30以外の学生との交流、各支援・事務室でのやり取り、英語プログラム以外の教員・職員とのコミュニケーション、学外における生活）において、実用的な日本語能力や日本の文化、日本人の考え方などに関する知識が必要不可欠であるという事実がある。また、グローバル30の修了者が、日本のよき理解者として将来活躍し、膨大な費用を使ってグローバル30という良好な学習環境を提供している日本という国とその社会に還元・貢献できるようにするためには、在学中にできるだけ多くの日本人と交流をして、日本に関する理解を深め、日本語能力を向上させる必要があると考えられる。

このようなグローバル30所属留学生の日本語学習のニーズを受けて、筑波大学留学生センターを開設母体とする「グローバル30日本語・日本事情等コース」を平成21年度から新たに設置し、平成22年度より実際の授業を開始している。本コースでは、日本語能力、および日本の社会、文化、歴史などに関する理解力の養成を主な目的とした教育活動を実施している。以下では、まず、グローバル30日本語・日本事情等コースの概要を提示し、その教育内容、および到達目標を説明する。そして、今後の課題に触れてから、本報告をまとめる。

2. G30日本語・日本事情等コースの概要

グローバル30日本語・日本事情等コース（以下G30日・日）は、それに所属する学生を対象に、外国語としての日本語科目、及び日本事情等科目を提供するコースとしてデザインされている。大きく分けて、次の二つの目標がある。ひとつは、グローバル30所属の学生の日本語能力を向上させることである。もうひとつは、日本の社会・文化に対する理解力や洞察力を深めることである。グローバル30の基本的な特徴の一つとは、英語を媒介語とする教育活動であるといえる。一方、学生の日常生活の中で、大学の授業というのはその一部分でしかないという事実もある。健全で快適な大学生活を送る上で、また、学問的知識、および日本の文化・思想に関するより深い追求を可能にするために、一定の日本語能力は必要不可欠であると考え、G30日・日では、学生の日本語能力の向上を特に重視している。

この節では、コースの概要を述べる。まず、日本語科目の体制を説明する。授業開始年度の平成22年度とその翌年の平成23年度とでは、日本語科目の体制に大きな変更があったので、それぞれ旧体制と新体制に分けて説明する。そして、日本事情等科目の体制を説明する。最後に、G30日・日で勉強する留学生の特色について述べる。

2.1 日本語科目

2.1.1 設問項目から見た特徴

筑波大学のグローバル30プログラムでは、第1外国語（日本語）が必修になっており、計4.5単位を取得しなければならない。授業開始年度のG30日・日では、日本語科目が通年型で、3つあった。各科目を履修すると、1.5単位が与えられ、日本語の必修単位は2学期+集中で取得する仕組みになっていた。当初、主に日本語未習者を想定していたため、レベルは1つしか設けられていなかった。しかし、入学予定の学生の日本語能力をJ-Cat¹で測ってみたところ、初級から中・上級に当たる学生の存在が確認できた。そこで、専任である筆者に加えて、非常勤の先生を1名採用し、レベルを3つの班に分けて、2人の教員で授業運営が成り立つようにe-Learningを利用しながら、以下の表に示すように平成22年度の授業体制を整えた。なお、プログラム運営上、グローバル30は第2学期（8月）入学となっている。

表 1. 平成22年度の日本語科目体制

開講学期	授業名	班		
		初級（未習者）	初級（既習者）	中・上級
夏期集中講座 (10日間)	日本語 1	1 時限目	1 時限目	※なし
	日本語 2	2 時限目	2 時限目	なし
	日本語 3	3 時限目	3 時限目	なし
第 2 学期 (10週間)	日本語 1	水曜	水曜	水曜
	日本語 2	木曜	木曜	木曜
	日本語 3	金曜	金曜	金曜
第 3 学期 (10週間)	日本語 1	水曜	水曜	水曜
	日本語 2	木曜	木曜	木曜
	日本語 3	金曜	金曜	金曜

※ 授業開始年度のG30日・日には、教員は2名しか配置されていなかったため、すべての班に同時に対応することはできなかった。しかし、第2学期が始まると、留学生センターの日本語補講も開始するので、中・上級者をそこに入れることによって、対応できるようになった。夏期集中の分の単位は第2学期、第3学期で行った補習で取得できるようにした。

初級（未習者）の班では、Tsukuba Language Group編の「初級日本語J100～J200」を、初級（既習者）の班では同「初級日本語J300～J400」を使用し、英語をとおして基礎的な文法知識を与えながら、日常生活などに必要な会話能力や読み書き能力の養成を行った。そして、中・上級レベルでは、筑波大学留学生センターの日本語補講で提供されている「文法」「話す」「聞く」「読む」「書く」「漢字」などの技能別に特化した授業を利用して、より高度な日本語能力の発展を促進した。授業開始年度で不透明な部分が多かったため、日本語科目をG30所属の学生以外の身分を持っている学生には開放しなかった。

2. 1. 2 新体制

授業開始年度を終えて、様々に浮上してきた要改善点を考慮し、平成23年度に向けてG30日・日の体制を根本的に立て直した。まずは、夏期の集中講座を廃止して、その分の授業を翌年の第1学期に回した。こうするには、次のような理由がある。まず、夏期集中の時期に問題があることが分かった。入国管理の関係で、集中講座の開始前までに来日できない学生がいる上に、たとえ講座開始前に来日できたとしても、日本語以外の学類の集中講座やオリエンテーションなど、その他の予定が入るため、日本語の授業を欠席する場合があるのである。そして、来日して間もない学生に集中講座で日本語を勉強させても、新しい環境や慣れない生活に気をとられ、勉強に集中できないため定着率が低いということが明らかになった。

2つ目の主な改善点とは、授業を通年型から学期完結型に変更し、班をやめて正式なレベルを7つに増やし、それに対応できるように新たに教員を2名採用した。1つ目と2つ

目の変更を表2にまとめる。

日本語Ⅰ～Ⅳは週3回の授業で、グローバル30の1年生の固定時間割に組み込まれている。日本語Ⅴ～Ⅶは、留学生センター日本語補講開設の技能別の授業とプロジェクト・ワーク（後述）の組み合わせによって履修する。こうすることで、受講生の個人的な日本語学習ニーズに特化した学習コースが提供できる。教員Aは専任で、日本語Ⅰに加えて、中・上級の日本語Ⅴ～Ⅶを担当する。教員B～Dは非常勤である。このようにレベルを増やすことで、授業開始年度の最大の問題点であった粗すぎるクラス分けやそれに対応するために取り入れた班のシステムを改善し、様々な学習段階に達しているグローバル30所属の学生のために、より繊細かつ適切な日本語学習のサポートを提供できるようになる。

そして、3つ目の改善点とは、学習レベルや空き状況などによって、グローバル30以外の留学生にも日本語の授業を開放したことである。こうすることによって、各レベルの授業が毎学期開講できる受講生の適正人数を保ち、グローバル30内で隔離状態になってしまいう危険性の高いグローバル30の学生に、知り合いの輪を広げるチャンスも提供できると考えられる。

表2．平成23年度の日本語科目体制

8月入学 →	一年次	
	第二学期	第三学期
	日本語Ⅰ、担当教員A	日本語Ⅰ、担当教員A
	日本語Ⅱ、担当教員B	日本語Ⅱ、担当教員B
	日本語Ⅲ、担当教員C	日本語Ⅲ、担当教員C
	日本語Ⅳ、担当教員D	日本語Ⅳ、担当教員D
	日本語Ⅴ、担当教員A	日本語Ⅴ、担当教員A
	日本語Ⅵ、担当教員A	日本語Ⅵ、担当教員A
	日本語Ⅶ、担当教員A	日本語Ⅶ、担当教員A
二年次		
第一学期	3学期間で1科目ずつ履修すると、第1外国語（日本語）の必修単位（4.5単位）が取得可能	
日本語Ⅰ、担当教員A		
日本語Ⅱ、担当教員B		
日本語Ⅲ、担当教員C		
日本語Ⅳ、担当教員D		
日本語Ⅴ、担当教員A		
日本語Ⅵ、担当教員A		
日本語Ⅶ、担当教員A		

2.2 日本事情等科目

日本事情等科目には、次の12科目がある。

〔日本事情等〕

日本の自然や地理（日本事情科目）

日本の文化（日本事情科目）

日本の歴史（日本事情科目）

日本の社会言語学（日本事情科目）

日本の日常的な社会・文化（日本事情科目）

日本における生活と実践のコミュニティ（日本事情科目）

日本の文化（総合科目）

日本の社会（総合科目）

日本の歴史（総合科目）

キャリアデザイン1（総合科目）

キャリアデザイン2（総合科目）

キャリアデザイン3（総合科目）

以上の科目は、教務上の理由で「日本事情科目」および「総合科目」という2つの区分に分けられており、総合科目のみが必修である。科目名を見ると、重複するものがあるようだが（例えば、日本の文化）、実際には、それぞれ違う内容を取り上げたり、違うところに重点をおいたりしている。キャリアデザインとは、日本や海外における労働状況を取り上げて、母国語などに加えて日本語もできる、日本の文化を理解しているなどの特徴を兼ね備えているグローバル30の卒業生の就職活動をサポートする授業である。

日本事情等科目の体制に関しては、授業開始年度では特に問題は認められなかったもので、継続して、平成23年度においても同様の体制を利用することにした。日本事情等科目はすべて学期完結型であり、積み上げ式にはなっていないため、学生が好きなように組み合わせることで履修できるようになっている。また、日本語科目と異なって、授業開始年度からグローバル30外の留学生にも開放されている。その結果、短期留学生の受講生の割合が比較的多い。

2.3 学生について

上述したように、日本語科目は必修科目であるため、他のグローバル30科目とは異なり、学類のグローバル30に所属する1年生全員を対象としている。授業開始年度は、入学生の総人数が20名であった。翌年の平成23年度では22名であった。プログラム所属の学生の国籍は多様であるが、授業開始年度、次年度を通じて、中国人の学生が最も多い。授業開始年度、および平成23年度のグローバル30所属学生の国籍を下の図1、図2に示す。

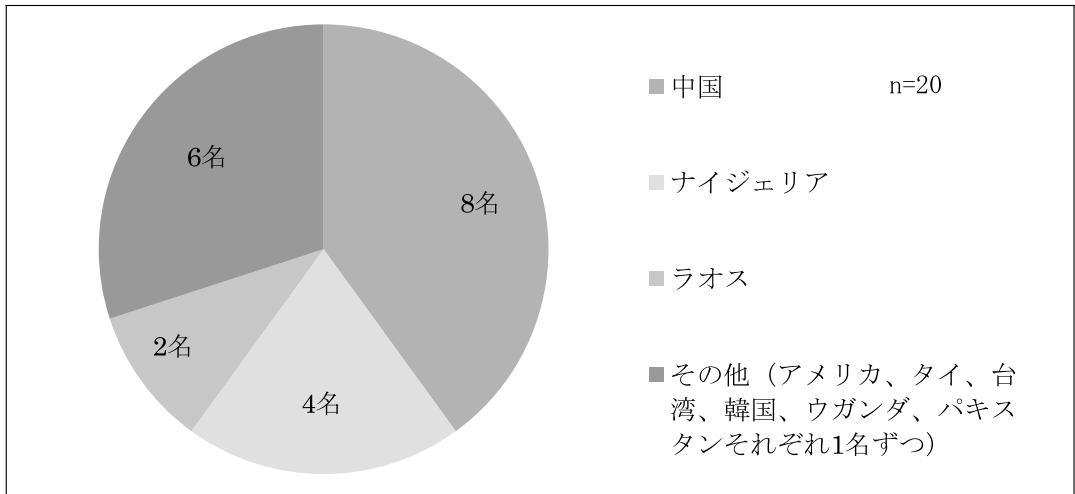


図 1. グローバル30所属学生の国籍：平成22年度

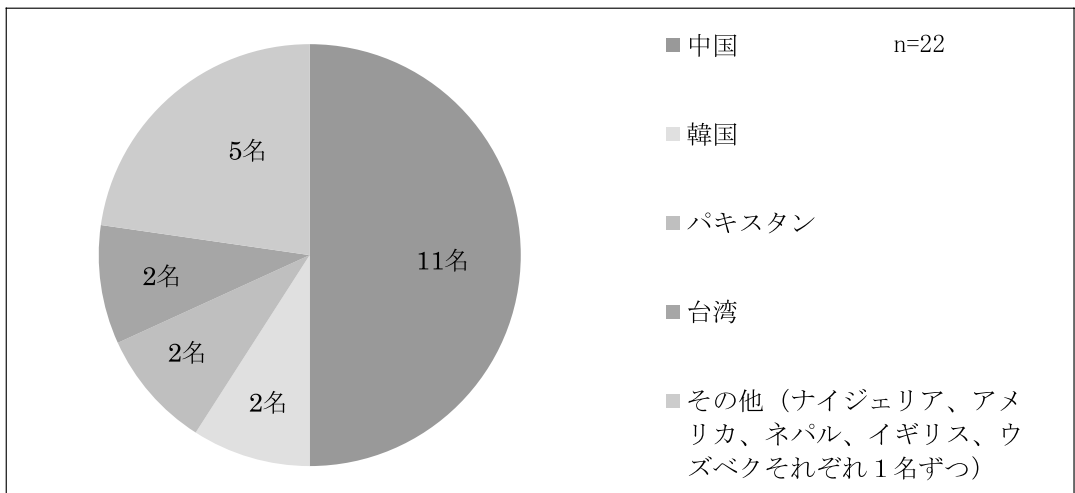


図 2. グローバル30所属学生の国籍：平成23年度

平均年齢に関しては、授業開始年度は平均23.5歳（最上＝33歳、最下＝19歳）であって、平成23年度は22.4歳（最上＝34歳、最下＝18歳）で、平均的に約1年若くなっている。入学時における学生の日本語能力に関しては、前述したように、幅広くばらつきがある。授業開始年度、平成23年度を通じて、完全な未習者から、幼時を日本で過ごし、初等教育を日本の小学校で受けた者までいる。また、平成23年度の入学者は、旧日本語能力試験の1級に合格しているものもいる。

この節で述べたように、G30日・日では多様性に富んでいる学生に対して日本語、および日本の文化・社会・歴史などを教えるという責任を担っている。そのような教育が効率

よく施せるように、既存の留学生センターの日本語補講との連携を作りながらカリキュラムを整備し続けていく予定である。次の節では、日本語科目、そして日本事情等科目の具体的な教育内容について述べる。

3. 授業の内容と到達目標

3.1 日本語科目

この節では、平成23年度のG30日・日における日本語科目の教育内容に関する説明をしていきたい。上述したように、G30日・日の日本語科目には「初級日本語」と「中・上級日本語」という大きな区分がある。ここでは、それぞれの授業でどのような教材を使用しているか、どのような教育活動を行っているのかを述べる。まず、初級日本語の日本語Ⅰ～日本語Ⅳに関する説明をする。その次には、中・上級の日本語Ⅴ～日本語Ⅶについて述べる。初級日本語では、筑波ランゲージグループ(2010)『初級日本語 Drill Book, J100-J400』(以下Drills)、および同(1995)『Situational Functional Japanese, Notes, Vol. 1-3』(以下Notes)を利用している。Drillsは教室で行う練習用のテキストである。新出語彙のリストは各課の始めに記載されているが、文法や文型に関する説明はなく、数多くの練習問題が並んでいるような形式になっている。文法などに関する説明のためには、Notesを参照する必要がある、授業の前と後にそれを使って、必ず予・復習をするように指示している。また、Notesを読んだだけでは解決できないような文法に関する疑問については、授業時間外に担当教員、あるいはコースコーディネータに相談するように指導している。これには、非常に限られた授業時間(1コマ=75分、週3回)でできるだけ練習に専念できるようにするという狙いがある。

日本語Ⅰ～日本語Ⅳのそれぞれの授業の細かい運営の仕方は、担当教員やその学期の学習者の特徴などによって多少異なる。しかし、各課の大まかな流れにおいては、初級日本語のすべてのレベルに共通している次の5つの段階がある。まず、その課の主な学習項目を導入する「Model Conversation」を提示する。学生がModel Conversationを逐一理解するのではなく、それによって導入される場面、そしてその場面に該当する活動を遂行するために使われ得る語彙や文型などを緩やかに認識するという目的がある。Model Conversationの提示はビデオ(Tsukuba Language Group作成のJapanese Conversation Practice Database: JACOP)によって行われるが、ビデオを見せる前に、それに描かれる場面だけを説明し、学生がまず英語でその場面を実演するように指示する。Swain & Lapkin(2000)によると、言語学習の際、初級レベルの学生に、すでに堪能な言語でメタ的な思考をさせると、認知的な負担が減り、より高い学習効果が見られる場合があると報告している。英語が堪能という共通点を持つクローバル30の学生に英語で場面を実演させることによって、日本語が未発達という理由で生じる可能性が高い言語的なトラブルを避け、

まずは語用論的な意識を高め、その場面に関連する活動を、日本語を使って達成するためには、どのような語彙や文型が必要になるかをメタ的に考えさせる。このような語用論的意識を高める活動が可能なのは、グローバル30所属の学生には英語という共通語があるためである²。

次の段階は、「Structure Drills」である。Structure Drillsでは、新出語彙や文型を、既習のそれと組み合わせて文を作る多量の練習問題をさせる。この段階では、前段階のModel Conversationで意識化させた場面の活動が達成できるための語彙や文型に注目しながら練習するように指示する。こうすることによって、Structure Drillsでやる機械的な練習をModel Conversationという現実世界的な場面とそれにおける活動につなぎ止めて、Structure Drillsの練習を、目的意識を持ってやるようにする。そして、Structure Drillsの後には、「Conversation Drills」がある。Conversation DrillsはStructure Drillsで練習した文型などを会話の断片に組み立てて、ペアで短い会話のやり取りをやらせる活動である。これらの断片は第1段階のModel Conversationに準拠したものであるため、学生にとっては、Structure Drillsで練習していた文型などを目的の場面に初めて適用するという一方で、とてもやり甲斐のある活動のようである。ただ、多くの場合、スクリプトがあり、学生はそのスクリプトに適切な単語をはめたり、適切な文型に置き換えたりすることによって練習するので、非常に限られた練習形式で、本物の会話から乖離しがちになる。そこで、様々な不慮の事態（contingencies）を乗り越えなければならない本物の会話に一步近づかせるため、第4段階の「Role Play」が設けられている。Role Playでは、スクリプトに頼らずに、相手の反応を見ながら、前段階の練習で鍛えてきた技能を総動員して、Model Conversationに類似したやり取りを自分たちの日本語でやってみる。そして、最後の段階では、その場で会話をする、あるいは準備してきた寸劇のようなものを披露する形式を取る口頭試験、および新出文法・語彙の小テスト（筆記）によって、その課の学習効果を評価する。

以下では、初級日本語の各レベルの学習内容に関する具体的な説明をする。

〔初級日本語：日本語Ⅰ～日本語Ⅳ〕

日本語Ⅰ

日本語Ⅰでは、Tsukuba Language Group編の『初級日本語J100』を利用している。以下の6課を学習する。

- 第1課 紹介する
- 第2課 郵便局で
- 第3課 レストランで
- 第4課 場所を聞く

第5課 分からないことばを聞く

第6課 事務室で

日本語Ⅰに加わる学生には、授業開始前までに自学自習でひらがなの読み能力を身につけることが義務づけられている。これは、教科書がすべて漢字仮名まじり（ふりがな付き）で書いてあるため、基本的なひらがなの読み能力がなければ、教科書がすぐに使えないからである。G30日・日では週3回の授業しかなく、教室で学習する時間が非常に限られているため、初日から本格的に教科書を利用した練習活動を開始しなければならない。カタカナに関しては、教室で導入して、9つの課題からなるカタカナ宿題のコースパックを利用して学習する。

日本語Ⅱ

日本語Ⅱでは、Tsukuba Language Group編の『初級日本語J200』を利用している。以下の6課を学習する。

第7課 電話をかける(1)病院

第8課 許可を求める

第9課 病院で

第10課 デパートで

第11課 本屋で

第12課 道を聞く

そして、日本語Ⅱからは、身近なストーリーを語る、および大勢の前で発表をするという活動を学び始めると共に、漢字の学習も始める。ストーリーの語り方を学習する教材としては、杉浦・小野寺・ボイクマン (2011)『わたしのにほんご』を使用し、以下の5課を学習する。

第2課 明日は行きません

第3課 私は毎日...

第4課 楽しかったです

第7課 びっくりしました

第8課 「住めば都」ですか

当教材の最も顕著な特徴とは、意味の理解を妨げないような間違いを恐れずに既習の日本語でできるだけ詳細にストーリーを語ること、そして一方的に伝えるのではなく、聞き手を意識しながら話すことの養成に力を注いでいる点だと言える。

漢字の学習の教材に関しては、加納・清水・竹中・石井（2010）『Basic Kanji Book 基本漢字500』の第1課から第6課までを使用している。その際、特に漢字が認識できるようになり、読む力が身につくように、読みの練習を集中的にやっている。

日本語Ⅲ

日本語Ⅲでは、Tsukuba Language Group編の『初級日本語J300』を利用している。以下の6課を学習する。

- 第13課 喫茶店で
- 第14課 忘れ物の問い合わせ
- 第15課 本を借りる
- 第16課 電話をかける(2)タクシーを呼ぶ
- 第17課 友だちを誘う
- 第18課 電話をかける(3)指導教官の家

そして日本語Ⅱに引き続いて、身近なストーリーを語る、および大勢の前で発表をするという活動を学び続け、漢字の学習も続ける。『わたしのほんご』から以下の5課を学習する。

- 第9課 ゴールデンウィーク
- 第10課 貸します、借ります、返しません
- 第11課 好きです
- 第12課 嬉しいプレゼント、悲しいプレゼント
- 第13課 何か言いたい

漢字の学習については、『Basic Kanji Book 基本漢字500』の第7課から第12課まで学習する。また、読み中心の練習に加えて書きの練習もこのレベルから少しずつ増やしていく。

日本語Ⅳ

日本語Ⅳでは、Tsukuba Language Group編の『初級日本語J400』を利用している。以下の6課を学習する。

- 第19課 訪問
- 第20課 やり方の説明
- 第21課 苦情
- 第22課 お見舞い
- 第23課 頼みと断り
- 第24課 旅行の相談

漢字の学習は『Basic Kanji Book 基本漢字500』の第13課から第18課まで学習する。そして、『わたしのにほんご』は日本語Ⅳの学生には易しすぎるため、学習者のレベルやニーズに見合う副教材を使用する形になる。その場合、担当教員が中級の教科書、および新聞や雑誌、インターネットなどから適切なものを選んだり、自己作成の教材を使ったり、学生の口頭能力・読み書き能力を向上させるための豊かな学習環境を整える。日本語Ⅳの最も重要な役割とは、学生が中・上級レベルの授業で勉強し続けられるように、既習の日本語を固めながら、より幅広い日本語の使用場面に触れさせることである。

以上、日本語Ⅰ～日本語Ⅳの学習内容をあげた。大雑把に言えば、留学生センター日本語補講J100～J400に相当するものである。これは、主要な教材のDrillsやNotesが共通であるという点からも窺われる。しかし、学習内容こそ似通っているとはいえ、日本語補講では週5回の授業（一学期間計50回前後）を使っているのに対して、学類の固定時間割上、G30日・日では週3回の授業（一学期間計30回前後）しか与えられていない。そこで、学習内容を薄めることなく授業を実施するためには、工夫が必要である。そのもっとも代表的なのは、ムードル（Moodle）というインターネット経由のe-Learningシステムの使用である。

各G30日本語科目で各学期取得可能な1.5単位は、45時間（1回分の授業〔75分〕を1時間と見なす）を基準として計算されているようである。ただし、上述したように、実際に教室で集まるときは、およそ30回しかない。したがって、教室に来ない日でも、いわば「授業日」と見なし、学生に課題の提出を求めることにした。そこで、日本語Ⅰ～日本語Ⅳの各レベルでは、教室に来ない日にやる提出課題（最多で15の課題）を設けている。各課題は授業の1回分に相当する。授業のレベルによって、課題は2種類ある。つまり、「書く」課題と「話す」課題で、産出を要請するものである。いずれの種類であっても、提出の方法は共通で、ファイルをムードルにアップロードしなければならない。「書く」課題では、まず、学生が宿題のファイルをムードルからダウンロードする。そして課題を読み、答えを入力してから、ファイルをムードルにアップロードする。一方、「話す」課題では、学生がICレコーダなどを使い、自分の声を録音し、音声ファイルをムードルにアップロードする。この活動をする際、学生が仲間とペアになって練習するように指示し

ている。ただ、実際の録音の対象となるのは、学生が課程を練習しているところではなく、淀みなくできるようになった練習の「産物」である。録音する内容は、教員がDrillsの中から選ぶ口頭練習問題である。

続いて、中・上級の日本語Ⅴ～Ⅶの説明に移りたい。上述のように、日本語Ⅴ～Ⅶは、留学生センター日本語補講開設の技能別の授業とプロジェクト・ワークの組み合わせによって履修する。技能別の日本語授業では、「文法」「話す」「聞く」「読む」「書く」「漢字」などの各言語技能別に特化した授業から受けたい授業を選び受講することにより、高度な口頭運用能力や聞き取り能力、語用論的能力、相互行為能力、および読み書き能力を身につける。ただ、このレベルになると教室内でやる勉強に加えて、教室外における実際の場面で日本語を使って様々な活動に参加することが極めて重要になる。しかし留学生にとって、教室から現実世界へと踏み出すことは容易ではない場合がある。にもかかわらず、教室ではうまく学べない技能や活動、人間関係の在り方やそれにまつわる言語の使い方などがある。例を挙げると、

- ・ 日本人大学生同士の先輩、後輩などの上下関係
- ・ 同級生同士の付き合い方
- ・ 共同作業における言語の使い方
- ・ 日本人との交流を通しての言葉の学習とその効果的なやり方
- ・ 日本人との効果的な交流の仕方

などである。このように、実際の場面での参加が、日本語学習において非常に重要な分水嶺のひとつでもある。日本人には当たり前に思えることでも、留学生にとっては、非常に理解が難しい問題であり、実際の場面で参加する際にしか触れることができない「普通の」、「普通の」振る舞いが、留学生にとっては、貴重なアフォーダンス（affordance ; Gibson, 1979 ; van Lier, 2000, 2002³）になり得る。そこで、そのようなアフォーダンスができるだけ多く提供されると思われる教室外の学習活動をサポートするために、日本語Ⅴ～日本語Ⅶでは、以下に示すようなプロジェクト・ワークを設定している。プロジェクトの目的とは、日本語の実用的な運用能力、語用論的能力、社会言語的能力等を高めることである。プロジェクトを完成させるためには、日本人学生に交えながら、日本語を実際に使って、情報を収集したり、活動に参加したり、そして、実際に参加することによって得られる見解を日本語による発表やレポートにまとめる必要がある。

表 3. 日本語Ⅴ～Ⅶで行うプロジェクト・ワーク

プロジェクトⅠ：	受講生がそれぞれ興味のあるサークルなどに関する情報を収集し、その中からいくつか（3つ程度）を選んで見学・情報収集する。そして、得られた情報をもとに発表をする。
プロジェクトⅡ：	プロジェクトⅠの続きで、情報収集したサークルを1つ選び、正式にそのサークル員になる。参加していく中での経験・問題点・感想などをもとにレポートを書く。
プロジェクトⅢ：	プロジェクトⅡの続きで、サークル参加で得られた情報・経験などで、新参者の手助けをする狙いも込めて「サークルの一員になるには」というテーマでレポートを書く。レポートをもとに最終発表をする。
プロジェクトⅣ：	受講生が独自のプロジェクトを遂行する。このプロジェクトに取り組む前に、G30日本語のコースコーディネーターにプロジェクトの具体的な計画書を提出してその許可を得る必要がある。（なお、許可されない場合もある）。
プロジェクトⅤ：	「日本語で教えられる『日本語・日本事情科目』、あるいは、「日本語で教えられる専門科目」の内から1科目を聴講する。その中でどのような日本語学習の機会があったか、授業に参加するためにどのように日本語を使わなければならなかったのかをまとめるレポートを書く。なお、これらの授業はすべて日本語で行われるため、文法のレベルがJ800以上の学生のみこのプロジェクトを選べる。

プロジェクトⅠ～プロジェクトⅢは連続しており、高い番号のついているプロジェクトを選ぶ前には、その下の番号がついているものをすべて履修し終わらなければならない。プロジェクトⅣ、およびプロジェクトⅤに関しては、それぞれ独立したプロジェクトであり、書かれた条件さえ満たしていれば履修できるようになっている。

日本語Ⅴ～Ⅶで利用する教材に関しては、各学習者の個人的なニーズに特化した授業なので、使われる教材や具体的な教育内容などが広く異なる。ただ、留学生センター日本語補講の技能別授業のレベルという視点から見ると、次のようになる。

〔中・上級日本語〕

日本語Ⅴ（筑波大学留学生センター日本語補講J500～J600相当）

日本語Ⅵ（筑波大学留学生センター日本語補講J600～J700相当）

日本語Ⅶ（筑波大学留学生センター日本語補講J700～J900相当）

次の節では日本事情等科目の内容に言及する。

3.2 日本事情等科目

上述の如く、日本事情等科目では、講義やディスカッションを含めて、すべての教育活

動は英語によって行われる。全学の留学生を対象とし、日本人学生に関しては、現在は聴講のみを許可している。

「日本事情科目」が6科目、「総合科目」が6科目で計12科目ある。日本事情科目では、日本の自然や歴史、そして（特に日常的で人間関係に関わるレベルの）社会・文化と、それを基盤とした国際人としての活躍能力を主眼とする内容を取り上げる。英文の読み物（教科書、記事、学術論文等）を精読し、ディスカッションを通してそれぞれの読み物に対する理解力を深めるとともに、フィールドワークなどを通して、日本の社会や文化が日本人の日常生活の中でどのように産出、維持、変更、修復などされているかを学生に自ら確かめさせて、それが自分に対してどのような意味合いを持つかを考えさせる。

総合科目では、日本の歴史、そして社会、文化、および筑波大学で教育を受けた国際人としての将来のキャリアに関する内容を取り上げる。内容こそ異なるが、形式は日本事情科目と類似しており、英文読み物の精読、ディスカッション、そしてフィールドワークなどを盛り込むことによって、日本の歴史や社会・文化、そして自らのキャリアについて考えさせて、将来の活躍のために備えておくように指導する。

以下では、日本事情等科目の各授業の学習内容に関する説明をする。

〔日本事情1～日本事情6〕

日本事情1（日本の自然）

日本事情1では、学期や担当教員によって具体的な内容は異なるが、概ね日本の風土、地方の季節にまつわる行事や習慣、日本の地理（都道府県の名称や位置、主要な都市など）に関するトピックを概観する。教材に関しては、担当教員の判断で、取り上げるトピックに適切な読み物を選択する。

日本事情2（日本の文化）

日本事情2では、日本文化や伝統などに関する様々なトピックを取り上げる。例を挙げれば、相撲や歌舞伎、祭り、食文化、芸術などである。ただ、日本事情1と同様で、具体的な内容は学期や担当教員によって異なる。また、教材に関しても、日本事情1と同様である。

日本事情3（日本の歴史）

日本事情3では、日本の歴史における特定の時代（例えば、平安時代、江戸時代など）を取り上げて、その時代の特徴や、日本の歴史の大きな流れにおける位置づけなどについて考えさせる。教材に関しては、上記同様である。

日本事情 4 (日本語と日本社会)

日本事情 4 では、敬語や丁寧体、普通体の使用・使用場面、力関係、女ことば・男ことば、方言、若者言葉などのようなトピックを取り上げ、日本語と日本社会の相互関係を考えさせる。教材に関しては、担当教員が様々な論文や専門書から抜粋した章を集めて用意するコースパックを用いる。

日本事情 5 (日本の社会文化)

日本事情 5 では、日本の社会文化にまつわるトピックを概観する。ここでは、「社会文化」という言葉は日常的かつ人間関係的なレベルにおける文化を指す。トピックの例を挙げると、あまえ、うち・そと、縦社会、場などである。つまり、日本事情 2 で取り上げるようないわゆる「大きい文化」に関わるトピック（例えば、歌舞伎や相撲、食文化など）とは対照的である。教材に関しては、日本事情 4 と同様である。

日本事情 6 (日本における生活)

日本事情 6 では、日本における生活や学習を考える上でひとつの手掛かりとなり得る「実践のコミュニティ」という概念をまず概観する。そして、日本での日常生活における言語学習のあり方、また日本人との（非）効果的な交流の仕方などについて、毎週の読み物を起点にして、考えさせる。教材に関しては、上記同様である。

〔総合科目〕

日本の文化

日本事情 2 と同様だが、内容が重ならないように、調整する。

日本の社会

日本における階級、労働の状況、差別、家族、教育などに関するトピックを取り上げて考えさせる。教科書は通常 Sugimoto (2003) “An Introduction to Japanese Society” を利用するが、学期や担当教員によって、異なる場合もある。

日本の歴史

日本の歴史の全体的な流れを、縄文時代から第二次世界大戦後までを取り上げながら、概観する。教材に関しては、担当教員の判断によって選択される。

キャリアデザイン 1

キャリアデザイン 1 では、日本の教育制度を概観し、それを海外の教育制度と比較する。教材に関しては、日本事情 1 と同様である。

キャリアデザイン 2

キャリアデザイン 2 では、日本語の様々な企業を概観し、その文化や構造を確認すると共に、海外の企業との比較を行う。教材に関しては、キャリアデザイン 1 と同様である。場合によっては企業見学などにも参加する。

キャリアデザイン 3

キャリアデザイン 3 では、世界の市場における日本の製・商品や文化などを位置づけながら、卒業後の路線を考えさせる。場合によってはフィールドワークも行う。

以上、日本事情等科目の教育内容を取り上げた。次の節では、G30日・日の教育水準に関して述べることにする。

3. 3 達成すべき水準

G30日・日の到達目標に関しては、次の 3 つの領域における達成すべき水準を想定している。日常生活、大学における活動、そして卒業後の活躍・貢献である。この 3 つの領域で要される日本語能力に関していえば、基礎的なコミュニケーション能力 (survival)、ならびに実用的な会話・相互行為能力 (interactional)、高度な運用・社会言語・語用論的能力 (academic/professional) である。

最初の「survival」および「interactional」はCummins (2008) が提唱している “basic interpersonal communicative skills” (BICS) に相当し、最後の「academic/professional」は同 “cognitive academic linguistic proficiency” (CALP) に相当するといえる。ただし、実際には、各能力間には明白な境界線がなく、例えば 2 つ目の領域の大学における活動で、日本語で教えられる授業という具体的な場面・状況において、複数のレベルの能力が必要となるはずである。つまり、講義を聞いて理解する、その内容についてのディスカッションに参加する、それに関わる専門書や論文を読むなどのような行為は academic/professional な能力が要されるわけだが、授業の前後に仲間とお喋りをする、授業中にペン・教科書などを貸してもらい、授業の日程について聞くなどのような行為に関してはむしろ interactional、あるいは survival に属する能力が必要だと思われる。このような行為は「大学の授業を受講する」という大きな活動の不可分の構成要素であり、十全に参加する上では、どれか一つを欠かすことは不可能であろう。よって、これら 3 つの能力はお互いに独立的な関係ではなく、重層的な関係にあって、上位の能力が下位の能力を包摂するような形になると考えられる (図 3 参照)。

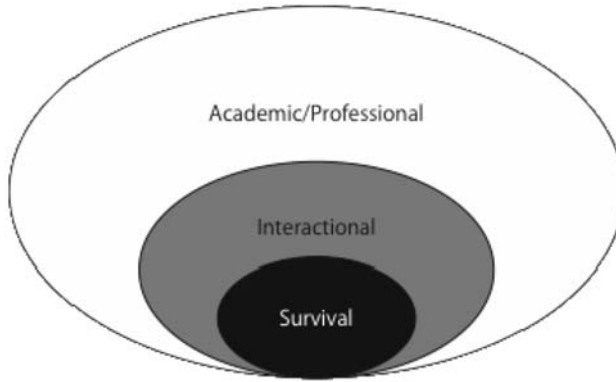


図3. 3つの能力の関係

G30日・日の3つの到達目標に関するより具体的な記述を以下に掲げよう。日常生活の領域に関しては、慣れない環境でのサバイバルが切実な問題となる。買い物をする時や道案内を聞く時などに、チューターやG30のスタッフに逐一頼ることは不可能であろう。つまり、英語プログラムの学生であっても、日本語ができなければ、また、日本語の社会や文化に関する基本的な知識がなければ、日本で生活する以上、不自由な立場になってしまい、生活そのものが非常に困難になる可能性が高い。したがって、G30日・日の教育達目標とは、すべてのプログラム所属の学生に基礎的な日本語能力（特に日常的なやり取りに関わる能力）を身につけさせ、また日本の社会や文化の在り方に関する基本的な知識を持たせることである。

そして、大学における活動の領域に関しては、現在筑波大学のそれぞれの教育課程では、G30科目を含めて、英語による授業はまだ非常に限られている。一方、日本語による授業には、非常に豊富な選択肢がある。また、正式な授業における教育のみならず、様々な課外活動（サークルなど）においても、学習の機会が豊かにあると考えられる。上述したように、サークルなどへの参加とは、日本語学習者にとって、教室では学べない（＝教育側として効率的に教えられない）様々な社会的要素やそれに関わる言語使用能力を身につける貴重な活動である。加えて、社会的な要素や言語能力に限らず、実質的な技術や専門知識をもサークルでの参加をとおして獲得することができる場合が多い。G30所属の学生が日本語で教えられる授業、および日本語で行われる課外活動などに、十全な形で参加すること、そしてそのような参加をとおして様々な学習機会に出会い、それを活かすことによって、より高度な日本語能力・日本文化に対する理解力を身につけるということがG30日・日の2つ目の到達目標である。

そして最後の領域は、人材育成に関わっている。G30英語プログラムで英語による教育を受けた学生には、大きく分けて、日本の一理解者として自国に戻って活躍する者と、日

本で暮らし、仕事をする者の両方がいると想定される。そしてどちらの場合においても、高度な日本語能力と日本に対する理解力が求められると考えられる。自国に戻る場合、日本という国に何年も生活し、日本の大学で教育を受けた以上、雇用先は一定の日本語能力・日本文化に対する理解力を期待すると考えられ、もしそれがない場合、従業員としての魅力が半減すると思われる。そして国内での就職の場合、日本の企業の8割が外国人の雇用条件として、実用的な日本語能力を重視すると報告している⁴。他大学で教育を受けた候補者に十分に競争できる日本語能力、そして各分野で実質的な貢献ができるだけの言語運用能力・深い文化理解力を身に付けさせることがG30日・日の3つ目の達成目標に当たる。

4. 今後の課題について

今後、G30日・日で主に取り組まなければならない課題には、学類の固定時間割との調整、学生の英語能力の不揃い、そして2学期制への移行という3つがある。まず、学類の固定時間割に関しては、必修科目が多く、時間的余裕がないため、日本語・日本事情などの学習に割り当てられている時間が非常に少なく、変則的である。現在、日本語の授業は水曜日の1時限目、木曜日の2時限目、そして金曜日の4時限目に実施されている。教室に集まる時間は週3回しかない上、金曜日から翌週の水曜日まで大きな隙間が空くため、毎週、ただでさえ限られた授業の時間の一部を復習に使わざるを得ない状況である。上述したように、現在の段階ではムードルなどによるe-Learningで、ある程度この実態の改善を試みているが、今後もさらに対応を洗練し、より効率の良い教育を提供していきたいと考えている。

そして2つ目の課題だが、学生の英語能力は一律ではなく、英語が堪能な学生とそうでない学生が混在する状況にある。これは、特に日本事情等科目において問題となり得る。上で述べたように、日本事情等科目では、専門性の高い内容に関して英語で講義やディスカッション、読み物をするため、受講生の英語能力におけるばらつきに対応することが緊要な課題である。現在では、たとえば難しい読み物を課するときは、手引きになる「reading guide⁵」を配布したり、講義のときにできるだけ易しい英語で、重要なポイントを複数回繰り返したりするような工夫をしている。しかし、このようなやり方でも、拾い切れない部分があり、今後はさらなる検討が必要である。

そして最後に、筑波大学では平成25年度からは現在の3学期制から2学期制に移行する予定である。この移行に伴って、G30日・日の授業体制、カリキュラム等を調整していく必要がある。その場合、留学生センターで実施されている日本語補講と連携させて、G30学生が必修となっている第1外国語（日本語）の単位を取得し終わってからも、留学生センターの日本語補講で任意的に日本語の学習がスムーズに続けられるようにしていきたい。そうするためには、G30日・日では日本語4、つまりJ400レベルまで履修し終わる必要が

ある。なぜなら、留学生センターの日本語補講では、J400レベルの授業まで週5回の授業となり、時間割上、補講で週5回授業に出ることがG30プログラム所属の学生にとってほぼ不可能に近いからである。しかし、J500レベル以上の技能別の授業であれば、それぞれ週1回のペースで展開されるので、G30所属の学生にとっても比較的スケジュールに取り込みやすい。現在、理想的なカリキュラムの案としては、前期・後期の15週間をフルに活かし、現在の各学期6課（上の3.1を参照）より2課分増やし、各学期で計8課をカバーすることによって、3学期間（計45週間）でJ400レベルの授業まで終わるというものである。ただし、上述のごとく、時間割面では学類に依存する形になっており、学類の対応を見ながら、できるだけ理想に近い形で日本語補講との連携が取れるような体制を整える必要がある。

5. まとめ

本報告では、筑波大学におけるG30日本語・日本事情等のコースを説明した。G30に採択された大学の中でも、筑波大学の取り組みは先駆的で、管見の限り、平成22年度から実際の授業に乗り出している唯一の大学である。上述のように、要改善点・解決しなければならない課題は数多くあるが、G30日本語・日本事情のスタッフと共に、一つずつ丁寧に取り組みながら進んでいきたいと考えている。

注

- 1 筑波大学留学生センターの今井新悟教授が山口大学と共同で開発した日本語能力判定テストのことである。このテストの主な特徴の一つとは、インターネット経由で日本語能力が自動的に判定できることである。詳しくは、www.j-cat.orgを参照。
- 2 プッシュネル（準備中）では、それぞれ直接法と媒介語法で行われる日本語の授業で出現する学習機会を、会話分析によって分析する。
- 3 アフォーダンスとは、ある生物とその環境との間に構成される関係に例えて、実際の状況でインターアクションに参加する過程の中で生じる様々な付随的な言語学習機会のことである（van Lier, 2000参照）。
- 4 「英語徹底『日本語力』が課題」読売新聞、2009年4月12日、15面。
- 5 課題の読み物の要点に集中させる質問や難しいと思われる語句に関する説明などを載せた資料のことである。

参考文献

- Cummins, J. (2008). BICS and CALP: Empirical and theoretical status of the distinction. In N. H. Hornberger (Ed.), *Encyclopedia of Language and Education* (pp. 487-499).

- Boston, MA : Springer US.
- Gibson, J. J. (1979). *The Ecological Approach to Visual Perception*. Boston : Houghton Mifflin.
- Sugimoto, Y. (2003). *An Introduction to Japanese Society* (2nd ed.). New York : Cambridge University Press.
- Swain, M., & Lapkin, S. (2000). Task-based second language learning : The uses of the first language. *Language Teaching Research*, 4 (3), 251-274.
- van Lier, L. (2000). From input to affordance : Social-interactive learning from an ecological perspective. In J. P. Lantolf (Ed.), *Sociocultural Theory and Second Language Learning* (pp. 245-260). Oxford : Oxford University Press.
- van Lier, L. (2002). An ecological-semiotic perspective on language and linguistics. In C. J. Kramsch (Ed.), *Language Acquisition and Language Socialization : Ecological Perspectives* (pp. 140-164). London : Continuum.
- 加納千恵子・清水百合・竹中弘子・石井恵理子 (2010) 『Basic Kanji Book, Vol. 1 (第4版)』 凡人社
- 杉浦千里・小野寺志津・ボイクマン総子 (2011) 『わたしのにほんごー初級から話せるわたしの気持ち・わたしの考え』 くろしお出版
- 筑波ランゲージグループ (1995) 『Situational Functional Japanese, Vol. 1-3 Notes (第2版)』 凡人社
- 筑波ランゲージグループ (2010) 『初級日本語 Drill Book、J100-J400』 筑波大学留学生センター